



押忍!手芸部 と 豊嶋秀樹 『自画大絶賛(仮)』

2011.11.23-2012.3.20

効率や分かりやすさを優先する現代社会のなかで、自由であるはずの創作活動にまで、私たちはマニュアルを求めているだろうか。つくること、つくるものに対して、理由や評価の基準を求めているだろうか。本展は、表現と鑑賞が交差し、多様な価値観を受容する現代美術館という場の特性を鑑み、つくる者、観る者の両者に、表現と鑑賞の意味を問いかける展覧会として企画した。

高度な手芸の技術をもつ「部長」石澤彰一(以下、部長)が、手芸の経験や技術をもたない「男前部員」と結成した「押忍!手芸部」は、「不器用上等!」を宣言し、技術やルールより、個人のつくりたい気持ちやつくる楽しさを尊重する活動を続けてきた。7人の部員を中心としたユーモアあふれる伸びやかな部活動は、ものづくりに当たり前のように横たわる既存概念を、鮮やかに覆してみせる。

一方、デザイン、アート、音楽、イベントプロ

デュース等ジャンル横断的な活動で注目されるアーティスト、豊嶋秀樹は、人や場との出会いを表現の出発点とし、モノや人、場との関係から、次々と新たな出来事を作り出す。従来の枠組に収まらない多様な活動は、媒介者でもあり表現者でもある豊嶋独自の視点で組み立てられている。

豊嶋は本展において「押忍!手芸部」と初めて出会い、その活動精神を読み解いて展示空間を構成した。その空間で「押忍!手芸部」部長は会期の約半分を過ごし、「部活」(ワークショップ)のみならず、日常的なものづくりの現場をも公開した。

展示プランは、展覧会場を劇場と見立てる豊嶋のアイデアに基づいている。演目は「押忍!手芸部」、役者は部長と作品、観客は美術館来場者、そして演出は豊嶋である。

4つの展示室と通路には下記のとおり機能が割り当てられた。

「自画大絶賛」展覧会 [通路]

「押忍!手芸部」の精神を伝える作品を選びケース展示。当館の過去の展覧会で使用されたアクリルカバー付展示台を再利用し、不要品等で作られたアクセサリーや縫いぐるみ等を博物館的な手法で展示した。

「自画大絶賛」ステージ [展示室7]

展覧会入口に敷かれたレッドカーペットが誘導する先には舞台があり、「部活」から生まれた10種類のアイテムを体験できるスペースが用意されている。「部活」では、作られた作品を自ら楽しみ楽しむことも重要な要素なのである。鑑賞者が楽しむ姿そのものがシナリオのない演目となり、舞台下の休憩スペースから鑑賞されるというシステムが作られた。

